

第3回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の在り方に関する検討会
議事要旨（ヒアリング部分）

1. 日時：令和7年7月30日（水）9:45～15:45

2. 場所：沖縄科学技術大学院大学

3. 出席者

（1）構成員

益一哉座長、塩見美喜子座長代理、大栗博司構成員、栗井浩史構成員、
高橋真木子構成員、塚本恵構成員

（2）内閣府

中嶋審議官、原審議官、田中室長

（3）OIST

学生、ポスト・ドクトラルスカラー等の研究員、教員

4. 議事要旨

ヒアリング

OIST 所属の学生4名、ポスト・ドクトラルスカラー等の研究員4名、教員（准教授）4名に対して、OISTの教育研究環境等についてのヒアリングを忌憚ない意見交換を行う趣旨から非公開で実施した。議事要旨はカテゴリーごとに整理している。ヒアリング対象者から主に以下のような指摘・意見があった。

●=ヒアリング対象者

①学生（4名）

- （OISTでの生活において、改善点はあるかという質問に対して、）教員が辞めた場合、当該ユニットに所属する学生はその年に卒業するか、他のユニットを探すなどしなければならぬため、学生には困難が伴う。
- スチューデントカウンスル（学生会）は大学院大学側と定期的にコミュニケーションをとっているが、学生も影響を受ける内容に関するコミュニケーションの取り方に課題はあると思う。
- 学生には研究アドバイザーとは別にメンターがつき、毎年定期的に面談をすることになっている。また、スーパーバイザーと学生の間を仲介してくれるオンブズパーソンは役立っていると思う。
- Graduate School Policiesの柔軟な変更はある意味良いことではあるものの、方針改定後に周知期間を設けた上で適用ということが徹底されるとより良いと思う。
- （OISTと他大学との違いについて、）一番は英語を使う頻度が全く違う。
- （学生が所属ラボの以外のPIとディスカッションする機会について、）3年次以降、基本的には自分たちで学会に参加し、そこで意見交換をすることができる。近い分野で

あれば、学内の先生とも積極的に議論している。

- (OISTへの入学について、) やりたい研究内容がOISTの研究室にあるのであれば、すごく勧めたい。
- (OISTについて、) 研究するのに良い機関であるし、ファシリティ施設があることが良いと思う。とても満足している。
- 修士号を取得済で、学生自身のやりたい研究が明確に固まっている場合、必ず最初にラボレーションに参加しなければならないというのを任意にしてはどうか。
- 元々やりたい研究があって入学したが、ラボレーションをしている間に研究したいことが変わったので、ラボレーションは興味深い仕組みと思う。
- ラボレーションで研究内容が大きく変わった。(他の大学だとそういった場合、) 試験があると思うが、そういう意味では、非常に助けられた。

②ポスト・ドクトラルスカラー等の研究員 (4名)

- (OISTにおいて、改善点はあるかという質問に対して、) OISTは素晴らしい場所であり、ここより良いところを見つけるのは難しいと思う。様々な機器にもアクセスできる。似たような施設は日本ではなかなか見つけることができないと思う。
- サイエンスを研究するという意味では、OISTは本当に素晴らしいところだと思っており、特に不満はない。自立した形で研究ができ、チームスタッフも充実しており、研究基盤もある。
- OISTは地理的に遠い場所にあり、キャンパスに住むのも良いが、社会・文化的な面で色々な場所からかなり離れている点が唯一期待と異なっていたところ。
- OISTに対する不平というわけではないが、外国人は日本の助成金になかなか申請できないということを聞く。日本の助成金の審査システムや、日本のサイエンスのオーガナイズのされ方が分かりづらい。
- OISTは大変国際的な文化を持っていて良いと思う。国際的な環境は日本では稀である。
- OISTは教員とポストドクターの中間的な立場のスタッフも多く、日本では助教、講師といった形で、学生のメンタリングを行うことができるのに対して、OISTでの中間的なポジションのスタッフでは学生にはアクセスできず、メンタリングはできない。
- OISTの強みとして、特にグラントセクションを通じた国際研究者への支援や、英語で利用可能な事務サポート、そして学際的で共同研究がしやすい研究環境が挙げられると考えている。一方で、内部の研究者が教員ポジションに応募すること自体は禁止されているわけではないものの、実際には移行が難しいという認識が広くあると感じている。
- 他の日本の地域と比べると沖縄は生活費が少なく済む。沖縄での生活を考えるなら、OISTの給与は良い。

③教員（3名）

教員①

- （研究支援スタッフのサポートについて、改善点があるかという質問に対して、）非常に充実しているなかで、敢えて改善点を挙げるとすれば、もう少し物理や化学系の専門家がいて良いというのはある。また、スタッフが足りないというよりは、専門性の問題もあると思う。
- 様々な研究者からの話を聞いていると、OISTは研究はしやすい所だと思っている。他大学の先生方の話を聞いていると、雑多な業務が多いと聞く。OISTは自分のやりたい研究に時間をより多く割けるという印象である。着任時のサポートも、研究に必要なものはほぼ全て揃えていただいた。（OISTを選んだ理由に関する質問に対して、）ポストドクターを継続的に雇用できるので、OISTの方が海外の他大学よりオファーが良かった。
- （子供の教育で将来への不安はあるかという質問に対して、）中学校までは割と良いがその先に問題があるというようなことをOISTに来る前から聞いているが、まだまだ先の話であるので、その時が来たら考えれば良いと思っている。

教員②

- （OISTでの研究へのサポート体制に係る質問に対して、）着任した際に大型の研究機器を研究室専有ということで整備いただくとともに、それ以外の設備は、色々なラボと共有のコアファシリティーを使わせてもらった。また、スタッフが4名採れるということで、ポストドクターやテクニシャンを採用した。現在、アソシエイト・プロフェッサーに昇進したため、5名のスタッフが採用できることになり、フルプロフェッサーになると、7名採用することができるようになる。人的なサポートは、例えば国内の研究機関と比べても、かなり優遇されていると思う。
- （OISTに改善点はあるかという質問に対して、）出産等もあり、ここの大学でなかったら、テニユア審査に通っていなかったと思う。学内保育園があるなどにより対応することができた。
- 保育園と小学校までは国際的なサポートが非常にあるような状況である一方、中学校、高校にそれが無いという子どもの中等教育の問題があると考えている。
- （研究についてのOIST側からの要請の有無について、）基本的にOISTは研究で何をしろと言われることは一切ない。自分がやりたいか、やりたくないかというところで一任されていてとても自由。その代わりに、5年ごとの審査（ユニットレビュー）が非常に厳しい。最終的に責任を持って結果を出さないといけないという仕組みになっている。テニユアを取得した教員も5年に一度レビューがある。評価によってPIの裁量で使える資金（ソフトマネー）が大きく減ることがある。
- 研究成果の特許申請に当たりスタッフの方のとても手厚いサポートがあった。

教員③

- (OISTでの研究のスタートアップの条件に係る質問に対して、) 大学が約束したものは全て支援してもらった。公式のポストドクターはおらず、スタッフサイエンティストが3名いる。また、そのうちの1名のシニアレベルのスタッフサイエンティストが実験を行っている。難しいのはコンピューティングリソースのマネジメントであり、サーバー維持のためにマネジャーを雇いたいと思っているが、内部のルールで、スタッフを置くことはできない。

私の最大の悩みは、スタッフサイエンティストの一人を契約職員として雇用しなければならぬことである。彼は私の研究室にとって最も不可欠な人材であるのに、彼は定年を迎えたため学内住宅に入居できず、リモートワークを余儀なくされているからである。

- 研究面では、OISTでは学際的な研究もできるし、他の所にはない環境がある。例えばアメリカにいた場合、もし自分の専門分野ではないところのグラントを得ようとする、これまでの実績を示せと言われ、自分の分野から離れることはできないが、OISTではそれができる。本当に学際的なものをしたいのであれば、分野を深掘りしている研究者と、その分野と分野の間でやっている研究者の両方が必要である。